

近代朝鮮半島に於けるリゾート地開発に関する研究 ： 外国人のリゾート地としての朝鮮半島

砂本, 文彦
広島国際大学

<https://doi.org/10.15017/2202943>

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.69-69, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



近代朝鮮半島に於けるリゾート地開発に関する研究

— 外国人のリゾート地としての朝鮮半島 —

広島国際大学 砂本 文彦

本研究は、日本統治下の朝鮮半島でのリゾート地の開発実態について研究を行うとともに、日本内地で実施された国際観光政策（外客誘致政策）との比較検証を通じて、植民地時代の朝鮮半島の観光とリゾートについて明らかにするものである。

日本統治下の朝鮮半島で、外国人が訪れた国際観光地・リゾート地開発といえば意外なものと思われる。恐らくは、朝鮮総督府施政下の朝鮮半島に外国人が「遊びに訪れていた」ということ自体が想像しがたいからではないだろうか。学界の状況としても、「観光」の萌芽は植民地時代にあったとしても、「国際観光政策」の萌芽は1960年代を待つ必要があった、ということになる場合が多い。とくに、植民地時代の「国際観光」については、日本人が朝鮮半島に訪れたという関係で語られることが多い。多かれ少なかれ、現在の韓国と日本の認識は、そういったものである。

ところで、思い出して欲しい。釜山ステーションホテルや新義州ステーションホテル、京城の朝鮮ホテルは、外国人の宿泊を想定して様式の設備を整え、朝鮮総督府鉄道局が整備していた。また、開港都市仁川には、それよりも早くから、気鋭の経営者により小規模のホテルが開業されていたことは周知の事実だ。日本統治下でも外国人は何らかの理由で朝鮮半島を訪れていた。ビジネスであったかもしれないし、観光としての可能性も排除できない。しかも、1930年代の日本内地は国際観光政策が実施され、国と地方団体、実業家の協力で12の国際リゾート地が建設された。朝鮮半島への影響はなかったのか。

本研究では、この認識を改変することを研究作業のクライテリアの一つに掲げ、朝鮮半島の近代観光が「植民地朝鮮—宗主国日本」といったクローズした関係にとどまらなかったことを検討対象としていく。近代観光というダイナミックな現象に朝鮮半島は直面して、国際性、多様性を内包した「場」として存在した面があったことを、外国人来訪の状況とその目的、そして彼らを受け入れようとした誘致策がどのようなものだったかを検証して、外国人のリゾート地としての朝鮮半島がいかなるものであったかの見取り図を描く。

例えば、1920年代の豪華客船での来訪状況や欧亜国際連絡運輸締結による鉄道旅行者増加への期待、宣教師による避暑地の形成、鉄道局、金剛山電気鉄道による金剛山の開発など、旅行、避暑目的の外国人が朝鮮半島のどのような場でいかなる時を過ごしていたかについて見ていく。